

II-3 遺跡整備・復原事業と展示

平城宮跡・藤原宮跡等の整備

1. 朱雀門案内所の設計

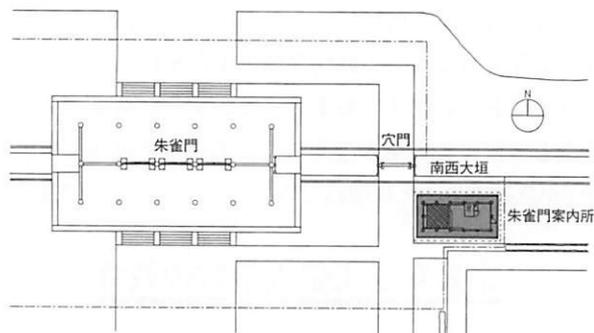
1997年の朱雀門、そして翌年の門両脇に接続する南面大垣の竣工をうけて、警備員控室と案内所の機能を備えた、朱雀門の管理施設を新設することになった。建設場所については、穴門と朱雀門をめぐる環状の動線を重視するとともに、平城第284次調査で、東院南面大垣に開く穴門脇で検出した3間×2間の「門房」風掘立柱建物跡を参照し、朱雀門東側の穴門南東脇とした。ただし、敷地

周辺では奈良時代の建物跡を検出しておらず、当該敷地について本年に行った事前の発掘調査（平城第307次）でも、建物跡をまったく検出していない。

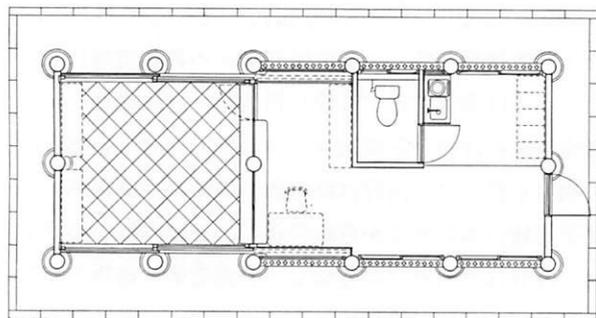
このため、朱雀門案内所を東院庭園西建物のような、復原建物として扱うことは不可能である。しかし、風致の観点からみると、周辺の遺跡整備景観と調和する施設でなければならない。したがって、建物の骨組には古代建築の技法を応用し、ほかにも伝統建築の細部を随所に借用して、目立たぬデザインを心がけた。

平面は東院との格差を考慮して、東西5間×南北2間にひろげ、基礎も礎石建とした。柱間寸法は6尺等間である。構造形式はRC基壇・木造平家建・切妻造棧瓦葺とする。

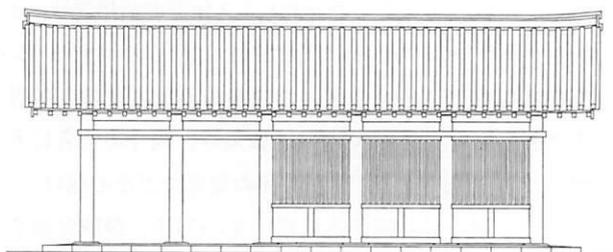
内部の利用方法は、穴門に近い西側2間が案内室、残る東側3間が警備員控室である。案内室では各種パンフレットを配布し、平城宮跡の案内図やポスター等を展示する予定である。将来的にはチケット売場になる可能性もある。平側2間にガラスを入れ、うち東側1間分を片引戸とし、オープンな空間に見せる。警備員控室は東側からの妻入として、平側は連子窓とした。污水处理施設は、建物東側の地下に埋設する。実施設計は1999年度に完了したので、2000年度春には建設に着工する予定である。



朱雀門案内所配置図 (1:1000)



朱雀門案内所平面図 (1:150)

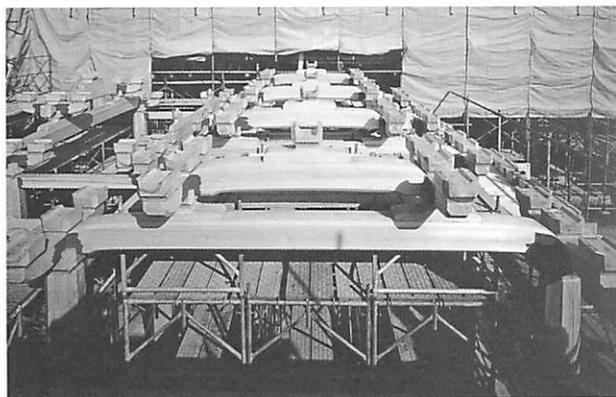


同左南立面図 (1:150)

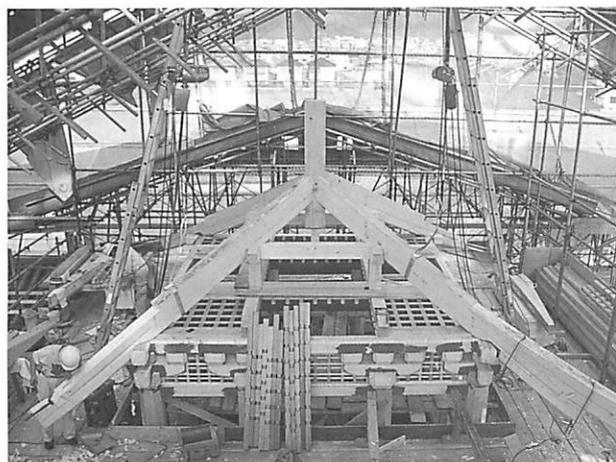
2. 東院庭園「隅楼」の復原工事

東院庭園東南隅に位置する「隅楼」SB5880の復原事業は、1999年度初頭に実施設計の修正を行い、7月から建設に着工した。99年度の検討事項としては、主に以下の2点があげられる。まず1点は、初層土間の仕上げについてである。この部分は園路の一部として理解してきたが、周辺地盤との関係を再検討したところ、遺構検出の最も早い段階で、建物外周の柱間に凝灰岩製地覆石の痕跡を残していたことがあきらかになった（遺構カードの検討による）。これを建物内外の見切り石と解釈し、建物内部をソイルセメントによるたたき仕上げとした。

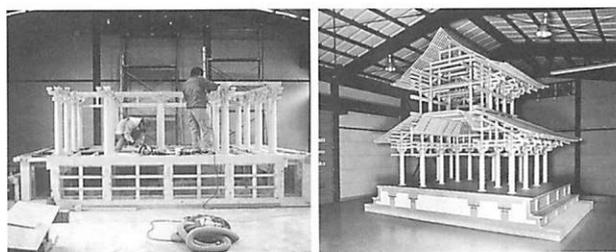
第2点として東面、南面大垣から落ちる雨が、隅楼初層の屋根にかかる恐れが生じたことである。そこでその解決策として、両大垣と隅楼が重なる部分については、大垣に雨樋を付けることとした。（清水重敦・浅川滋男）



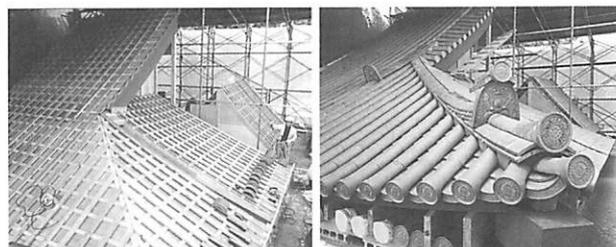
施工中の隅楼（下層二重虹梁まで組み上げ）



施工中の隅楼（上層隅木まで組み上げ）



五分之一構造模型の製作



屋根廻り試し葺き用実大模型の製作

3. 第一次大極殿の実実施設計

1999年度事業の概要 実施設計は3ヵ年計画で行っており、本年度は2年目にあたる。引き続き実施設計図書の作成をすすめるとともに、昨年度に設計した五分之一構造模型と屋根廻り試し葺き用実大模型を製作し、細部の納まりや意匠・構造のさらなる検討を行った。原寸図作成や製作過程から完成に至るまで観察を続け、同模型はその後で設計と諸研究の検討材料とするため存置させた。設計業務は(財)文化財建造物保存技術協会に委託し、模型も同協会が滝川寺社建築、山本瓦工業の協力を得て製作した。

五分之一構造模型 図面では表現しきれない隅部分の構造、全体の姿や意匠と構造のバランス、細部の納まりなどの検討を目的として、復原案の図面にしたがって製作した。規模は桁行三間分で、基壇の上に軸組、架構、組物、隅木、小屋組、垂木までの木部構造を組立てた。継手・仕口や部材の寸法、頭貫、通肘木、尾垂木、桁などの規格性、組物のこぐち斗や隅肘木と斗の造り出しなど、できるだけ古代の技法を採用した。

屋根廻り試し葺き用実大模型 大棟、鴟尾、けらば、降棟など棟と妻廻りの構造、意匠、納まり、さらに降棟の棟積みや鬼瓦の納まりなどを検討するため、これらが関係する屋根部分を断片的に原寸で製作した。上層の屋根の軒と破風尻をふくんだ隅部分、大棟頂部の妻部分、大棟の棟積端部の三基である。この屋根下地の上に、大極殿復原で採用を予定している出土瓦などの複製品を用いて、当時の手法を模索しながら種々の葺き方を試みた。

建築基準法に基づく認定の手続 大極殿は高さが13mを越える木造建造物であって、建築にあたり法律に基づく

建設大臣の認定が必要であった。筋違端部を炭素繊維により補強した上部構造と、鉄筋コンクリート造の基壇部との間に免震装置を入れた免震構造によって構造上の安全をはかることとし、認定に必要な資料の作成と手続を行った。

実施設計図書の作成 設計図面は、基礎の免震装置の設計を完成させるとともに、昨年度作成の基本図に引き継ぎ、軸部、組物、軒、小屋組などに関する伏せ図を作成した。積算は、各部位の使用材料の算出、工事費概算の算出などを終了させ、本積算と仕様書の作成をすすめた。

4. 第一次大極殿院地区の復原準備調査

今後に計画される大極殿院地区の復原計画における仮設地盤の設定を検討するために、同院地区とその周辺部の現況地盤の調査を行った。また、一部の建物について、復原原案に基づき一般図の作成を行った。(木村 勉)

5. 藤原宮跡の整備

本年度、藤原宮跡では、内裏東官衙地区の整備および西南隅の説明板設置等の整備事業を実施した。

内裏東官衙跡では、遺構表示を中心とする整備を行った。宮内道路SF6640はジャミ入り樹脂舗装、その両側溝SD6618・6626は擬木を用いた溝で表示した。掘立柱塀SA6629・6630・6634・6635は柱位置でのヒノキ丸太立ち上げ(地上高40cm)および塀位置の花崗岩切石の埋込による平面表示の手法を用い、掘立柱建物SB6615は柱位置・壁位置を花崗岩切石の埋込、軒内を自然色舗装で平面表示した。また、遺構表示区域内の空地は芝生とした。さらに、今回整備した区域は高殿集落へ通じる南北方向の市道に隣接する位置であったため、緩衝帯として碎石舗装を施すとともに、遺構表示区域との境には擬木柵を設けた。整備面積は、約710m²である。

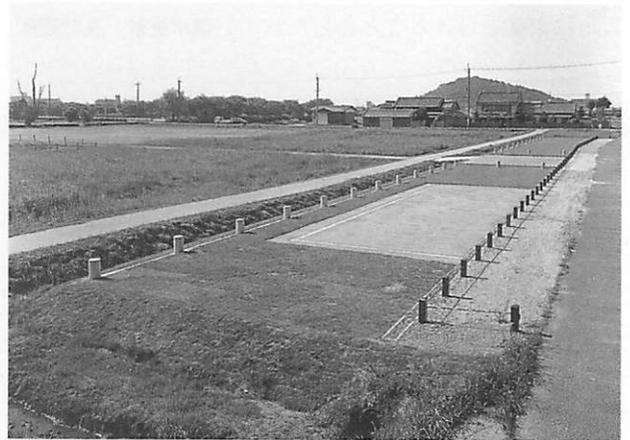
西南隅に設置した説明板は、西面大垣の藤原宮造営時における建設の様子を描いたイラスト陶板と、和文・英文による説明陶板2枚で構成し、躯体はコンクリート、外装は凝灰岩切石とした。このほか、車止め柵の設置、園路橋の改修等の小規模工事も実施した。

6. 山田寺跡の整備

山田寺跡整備は文化庁からの支出委任事業として実施している。平成5～9年度の事業では、整備面の造成ならびに伽藍建物等の盛土・張芝による遺構表示等の整備を行ったが、地盤改良に予想以上の経費を投入せざるを



平成11年度藤原宮跡整備位置図



内裏東官衙整備状況

得なかったため、当初の整備方針を達成するには至らなかった。このため、山田寺およびその遺構に関する来訪者の理解を助ける遺構表示・情報提供、ならびに来訪者に対する便益施設の設置などを内容とした当面の追加整備を、平成11～12年度に実施することとなった。

本年度は、東面回廊3間分(北から13～15間目・飛鳥資料館での復原展示箇所)の基壇緑石・雨落溝と内側の柱の礎石4個の復元表示、宝蔵の盛土・張芝による表示、金堂前の礼拝石の復元表示、ならびに上記整備3カ所の個別説明板の設置等を実施した。このうち、礎石と礼拝石の復元では、それぞれ遺構本来の石材である「飛鳥石」と「竜山石」を使用し、礎石は石工による手作業で彫刻を施した。また、説明板には、発掘調査時の遺構写真を焼き付けた陶板を用いた。(小野健吉)

7. 文化財資料棟の新営

本建物は、発掘技術研究（年輪年代学・環境考古学等新たな考古学分野の研究等）の進展、拡大に伴う研究拠点の充実と年々増加する文化財資料の保管管理に対応するため整備したものである。建設位置は、平城宮跡資料館駐車場から宮跡内へ至る構内苑路東側緑地に位置し、平城宮跡を訪れる人々のメイン通路に面することから、建物の威圧感を少なくするよう建物壁面線を極力後退し、苑路に面する部分及び建物周辺に植栽を配している。建物は、立地条件から平城宮跡内一連の建物との景観の調和を計るため、建物の形、色を統一した。内部空間においては、ホールや廊下が利用者のリフレッシュ空間として機能するものとして、木製カーテンウォール、不燃天然木の腰板、漆喰の壁・天井等、自然素材を使用しおらかな空間を創りだすよう計画した。

施設概要 構造：鉄骨造、階数：2階建、建築面積：714m²、延床面積：1166.91m²、高さ：7.98m、外装〔屋根：フッソ樹脂鋼板（折板t0.8mm）葺き、外壁：押出成形セメント板（t60mm）フッソ樹脂塗装〕、内装〔床：ビニル床タイル・タイルカーペット（一部OAフロア）、ゴム床タイル（共用部分）、内壁：石膏ボード・合成樹脂エマルションペイン



文化財資料棟

ト、共用部分セメント系薄塗左官仕上材（漆喰）、不燃天然木化粧板。天井：ロックウール化粧吸音板。共用部分セメント系薄塗左官仕上材（漆喰）

構造設計概要 構造形式：XY方向共ラーメン構造（主スパン5.0m×7.5m）、柱脚：露出型弾性固定柱脚工法、1階床：スラブ構造、2階床：デッキ合成スラブ構造。基礎：直接基礎（布基礎）設計地耐力7t/m²（遺構保護層地盤改良）

設備概要 電気設備〔照明：FRS15・FRS11・HML4・FRSL3V3・室内照度標準500lx、幹線：電灯幹線単相3線200/100V、動力幹線三相3線200V、電話：本庁舎交換機

に接続、情報通信ネットワークシステム：層より型メタリック光複合ケーブル（小講堂内HABより分岐）、電気時計拡声：水晶式親時計・呼出システム（1階エントランスに設置）、防災：火報P型複合受信機（1階エントランスに設置キュービクル・排水ポンプ等と合わせ第3収蔵庫警備室受信盤に連動）、受電：屋外型キュービクル式配電盤・変圧器単相75KVA 2台三相100KVA 1台（第2収蔵庫北側第1キュービクルより分岐）、機械設備〔給水：水道直結方式給湯：局所式瞬間式湯沸器屋外型、排水：汚水・雑排水公共下水道へ放流、換気：機械換気第1種・3種、空調：個別方式ガスエンジン式パッケージ型〕

予算措置 平成10年度補正予算建設省支出委任（今西康益/庶務部）



文化財資料棟 一階平面図（600m² 下） 二階平面図（566.91m² 上）